

平成27年度(第66回)芸術選奨受賞者一覧

【文部科学大臣賞:19名 文部科学大臣新人賞:11名】

部門	賞名	受賞者	職業	授賞対象
演劇	大臣賞	ケラリーノ・サンドロヴィッチ	劇作家・演出家	「グッドバイ」の成果
		はまだ 濱田 めぐみ	女優	「スコット&ゼルダ」ほかの演技
	新人賞	なりた たつし 成田 達志	能楽師 幸流小鼓方	うとう おぼすて 「烏頭」「嬢捨」ほかの成果
映画	大臣賞	あしざわ あきこ 芦澤 明子	カメラマン	「さようなら」「岸辺の旅」の成果
		たかや ひとし 高屋 齋	映画照明	りゅうぞう 「龍三と七人の子分たち」の成果
	新人賞	はまぐち りゅうすけ 濱口 竜介	映画監督	「ハッピーアワー」の成果
音楽	大臣賞	こだま ひろし 児玉 宏	指揮者	「大阪交響楽団第196回定期演奏会」ほかの成果
		なかがわ よしお 中川 善雄	はやし 邦楽囃子 笛方	「中川善雄 笛の会」の成果
	新人賞	なかむら えり 中村 恵理	声楽家	「中村恵理 ソプラノ・リサイタル」の成果
舞踊	大臣賞	なかむら しょうこ 中村 祥子	バレエダンサー	Kバレエカンパニー秋公演「白鳥の湖」ほかの成果
		ふじま らんこう 藤間 蘭黄	日本舞踊家	バレエ・日本舞踊 夢の饗宴「出会い」ほかの成果
	新人賞	やまむら ひかり 山村 光	日本舞踊家	「山村光リサイタル」ほかの成果
文学	大臣賞	おとかわ ゆうざぶろう 乙川 優三郎	作家	「太陽は気を失う」の成果
		のなみ 乃南 アサ	作家	「水曜日の凱歌」の成果
	新人賞	つむら きくこ 津村 記久子	作家	「この世にたやすい仕事はない」の成果
美術	大臣賞	はやしきょうすけ 林 恭助	陶芸家	「林恭助展」の成果
		むらかみ たかし 村上 隆	アーティスト	「村上隆の五百羅漢図展」の成果
	新人賞	みながわ あきら 皆川 明	ファッションデザイナー	「1∞ ミナカケル」の成果
放送	大臣賞	やじま よしあき 矢島 良彰	プロデューサー	「女たちの太平洋戦争」ほかの成果
	新人賞	さ さ き あきら 佐々木 聡	ディレクター	「奥底の悲しみ～戦後70年、引揚げ者の記憶～」の成果
大衆芸能	大臣賞	はんしん きょじん オール阪神・巨人 (オール阪神) (オール巨人)	漫才師	オール阪神・巨人40周年記念公演「ふたりのW成人式」の成果
		まつもと たかし 松本 隆	作詞家	コンサート「風街レジェンド2015」ほかの成果
	新人賞	やなぎや さんざ 柳家 三三	落語家	「月例三三独演」ほかの成果
芸術振興	大臣賞	ひ び の かつひこ 日比野 克彦	アーティスト	「六本木アートナイト2015」ほかの成果
	新人賞	ひろかわ あさこ 廣川 麻子	NPO法人シアター・アクセシビリティ・ネットワーク理事長	シンポジウム「より良い観劇システムの構築に向けて、今できること」ほかの活動
評論等	大臣賞	かめい わかな 亀井 若菜	滋賀県立大学准教授	「語りだす絵巻－『粉河寺縁起絵巻』『信貴山縁起絵巻』『掃墓物語絵巻』論」の成果
		ちようき せいじ 長木 誠司	東京大学教授・音楽評論家	「オペラの20世紀 夢のまた夢へ」の成果
	新人賞	やまもと さとみ 山本 聡美	共立女子大学教授	くそうず 「九相図をよむ 朽ちてゆく死体の美術史」の成果
メディア芸術	大臣賞	くぼた 晃弘 久保田 晃弘	多摩美術大学教授	「ARTSATプロジェクト」の成果
	新人賞	ヤマザキ マリ	漫画家	「スティーブ・ジョブズ」ほかの成果

※敬称略・部門内50音順・受賞者名の下線は女性

平成27年度(第66回)芸術選奨
文部科学大臣賞 贈賞理由

部門	受賞者名	贈賞理由
演劇	ケラリーノ・サンドロヴィッチ	ケラリーノ・サンドロヴィッチ氏は、短い導入部しか遺(のこ)されていない太宰治の絶筆「グッド・バイ」を大胆に空想、翻案して上質の舞台を創り出した。氏らしい会話のズレやナンセンスを駆使し、シュールでウィットに富んだ軽快な群像コメディー劇に仕上げたセンスの良さは見事。演出家として多彩な出演者たちをまとめ上げるとともに、新たな魅力を引き出した点も賞賛に値する。作・演出を兼ねてきた活動の成果が受賞に結び付いた。
演劇	濱田 めぐみ	抜群の歌唱力でミュージカル界をけん引している濱田めぐみ氏は、演技力を充実させて平成27年驚くべき成果を上げた。「スコット&ゼルダ」では追憶と現在という二つの世界を演じ分け、「サンセット大通り」でも見せたように、栄光の中に生きる強烈な魂を表現して圧倒的な力を見せた。一瞬一瞬を濃密に熱くそして丁寧に生きることができるのは、本人が激しく燃える魂を持ち合わせているからであろう。その異彩は魂の奥から輝いている。
映画	芦澤 明子	カメラマン・芦澤明子氏のカメラワークには迷いがない。脚本世界と演出意図を深く理解、咀嚼(そしゃく)した、カメラを意識させない映像。平成27年には第68回カンヌ国際映画祭「ある視点」部門の監督賞を受賞した、死者との道行き「岸辺の旅」と、原発事故が起きた田園地帯が舞台の「さようなら」の2作品を担当。いずれも映像がストーリーに自然体で寄り添い、作品世界を広げている。特に後者の、静寂感のある映像と、肉体の風化をワンカットで撮った映像は肅然(しゅくぜん)とするほど見事である。
映画	高屋 齋	照明技師として多くの監督と野心的な作品を作り出してきた高屋齋氏は、特定の師匠からではなく、映画を見ることでライティングを覚えたという。とりわけ洋画の自然な光の使い方に強く憧れ、ハリウッドで学び、感じ取った間接照明を日本でいち早く自分のスタイルとして確立した。光に様々な色を混ぜながら、消しながら映画の空気感を重要視し、柔らかくナチュラルでありながらも陰影をしっかりとフィルムに焼き付ける。「龍三(りゅうぞう)と七人の子分たち」も撮影技師と共にその技術を十分に発揮した作品である。フィルムからデジタル以降も映像のお手本となる照明を遺(のこ)してくれることに期待したい。
音楽	児玉 宏	児玉宏氏は、大阪交響楽団の音楽監督、首席指揮者として、ユニークかつ一本筋の通ったプログラミングと演奏内容で日本のオーケストラ界に問題提起を続けてきた。平成27年は、このコンビが続けてきたブルックナー・シリーズの最終回として行われた大阪交響楽団第196回定期演奏会や、東京でのアジア・オーケストラ・ウィークで交響曲第9番を取り上げ、ブルックナーが最後の作品で到達した至純の世界をきめ細かく的確に表現するとともに、この上なく巨大な音宇宙を構築するなど、際立って充実した解釈を展開し、圧倒的な成果を上げた。
音楽	中川 善雄	中川善雄氏の活躍の場は、演奏会、舞踊公演、歌舞伎公演などの多岐にわたり、レパートリーも古典曲から現代曲に及ぶ。平成27年の「中川善雄 笛の会」では、古典曲と自作曲を取り上げて、笛の魅力と可能性を圧倒的な技量とともに披露した。氏の演奏の特徴は、ほかの奏者との絶妙なバランスを保ちながら合奏に溶け込む柔軟性と、作品の曲調を最大限に生かす豊かな表現力にある。「囃子(はやし)」は、何かを引き立てるという意味の「栄(は)やす」と語源を同じくするが、正にその境地を具現する人物である。

部門	受賞者名	贈賞理由
舞踊	中村 祥子	ウィーン国立歌劇場バレエ、ベルリン国立バレエ、ハンガリー国立バレエで長くプリンシパル(主役)・ダンサーを務めた中村祥子氏は、海外で多くの日本人ダンサーが活躍する中にもあっても、一際優れた実力を持つバレリーナとしてヨーロッパで高く評価されてきた。平成27年に日本に拠点を移し、ゲスト・プリンシパルとしてKバレエカンパニーの公演に立て続けに主演。特に古典バレエの代名詞的な名作である「白鳥の湖」では、卓越した技術に加え、繊細で可憐(かれん)な叙情性を存分に発揮してまれに見る完成度の「オデット／オディール」を踊り、特筆すべき成功を収めた。
舞踊	藤間 蘭黄	「バレエ・日本舞踊 夢の饗宴「出会い—Встреча—」」は、ファルフル・ジマトフ氏と岩田守弘氏の文字通りの「饗宴」による「信長—NOBUNAGA—」がメインの企画で、藤間蘭黄氏は作・演出・振付(岩田氏と共作)及び実演と、八面六臂(び)の活躍でよく舞台成果を上げた。この公演の第1部での清元「山帰り」は古典の名作だが、祖母藤子氏の名演にも匹敵する秀逸な舞台であった。また、このほかの公演での「七騎落(しちきおち)」の源義経(みなもとのよしつね)や「身替座禅(みがわりざぜん)」の奥方玉の井、日本舞踊協会公演の清元「幻椀久(まぼろしわんきゅう)」等の舞台でも光彩を放っていた。
文学	乙川 優三郎	人生の黄昏(たそがれ)を意識し始めた男女を端正な筆致で刻んだ現代小説の短編集である。山本周五郎賞、直木三十五賞を受賞した時代小説の名手が400字詰め原稿用紙30枚という枠を定めて14編をそろえている。一つとして似たような設定はなく、人物描写は精緻を極める。息苦しいほどの凝縮感である。 安易なハッピーエンドを好まぬ作家らしく、既成の文学への挑戦を自らに課していることがうかがえるのも頼もしい。
文学	乃南 アサ	本作は、敗戦直後に進駐軍の接待のために設立された慰安施設を扱っており、すこぶる平易で親しみやすい文章で、そこに関わる男女の心情や人生のみならず、国家と人権、戦争と平和といったテーマに切り込んだ、社会性と娯楽性を兼ね備えた大作である。思春期の少女の視点からこうした問題を取り上げ、物語の形で時代を浮かび上がらせたものはかつてなく、日本の現代史を踏まえ、扱いにくいテーマに誠実に向き合い、丁寧に掘り下げてきた作家的姿勢も高く評価される。
美術	林 恭助	林恭助氏は美濃(みの)の「やきもの」の伝統を学びつつ陶芸家としての研鑽(けんさん)を積んできた。中でも黄瀬戸(きせと)と黒織部(くろおりべ)に傾倒し、瀟洒(しょうしゃ)な作風を作り出してきた。加えて世界の「やきもの」の頂点とも目される中国宋代の曜変天目(ようへんてんもく)の再現を志してきた。平成27年の個展はそれらの充実した成果が発表され、新しい時代の優れた作家の登場を告げた。それが評価されて中国、韓国の展覧会に招待されている。今回の受賞を契機により一層の優れた作品制作と国際的な活動への期待が膨らむ。
美術	村上 隆	「村上隆の五百羅漢図展」は、日本では14年ぶりの大規模な個展である。特に東日本大震災を契機に制作された「五百羅漢図」は、横100メートル、縦3メートルという桁外れの規模と完成度に圧倒される記念碑的な作品である。オタクカルチャーやキャラクターを明治以前の日本美術と接続した独自の概念「スーパーフラット」を果敢に展開してきた村上隆氏の新天地であると同時に、日本の文化や歴史を根源的に俯瞰(ふかん)する、かつてない道標(みちしるべ)を示した。

部門	受賞者名	贈賞理由
放送	矢島 良彰	矢島良彰氏は昭和62年に番組制作会社テムジンを設立して以来、徹底した現場主義により、多くの優れたテレビドキュメンタリー番組を制作して演出家を育ててきた。特に戦後70年の平成27年に制作した「わたしの太平洋戦争」は、従軍看護婦の証言により、知られざる戦争の実像を描き出した。またドキュメンタリーの国際共同制作を目指すTokyo Docsを運営、ベトナムとの共同制作で「少女たちの子守歌」を制作、新しい風を吹き込んでいる。
大衆芸能	オール阪神・巨人 (オール阪神) (オール巨人)	上方漫才伝統のしゃべくり漫才で常にトップクラスの人気実績を持つこのコンビ、安易な東京進出を求めず、大阪に本拠地を置き、生の舞台が最も重要という信念の元、漫才の王道を歩き続けて40年。毎年の公演・高座数は400を超す。特に平成27年大阪・東京で行った「40周年記念公演「ふたりのW成人式」」はどこも超満員。客からのリクエストに応える即興漫才は、瞬時に「ボケ」と「ツッコミ」を転換する巧みな語芸で爆笑の渦を引き起こし、正に漫才の至芸と言うべきものであった。
大衆芸能	松本 隆	提供作品は2000曲以上。レコード総売上はおよそ5100万枚。日本の大衆音楽界を代表する作詞家、松本隆氏が紡ぎ出す歌詞は、幅広い世代の大衆の心にさりげなく、しかし深く浸透している。その活動45周年を祝うプロジェクトの一環として行われた集大成的なコンサート「風街レジェンド2015」には、30代から60代まで、歌謡曲からロック、クラシックまで、世代もジャンルも超えた多彩な面々が参加。氏ならではの叙情的でみずみずしい歌詞の世界を様々な切り口から浮き彫りにするとともに、音楽界におけるその貢献度の高さを改めて思い知らせてくれた。
芸術振興	日比野 克彦	日比野克彦氏は、人がそれぞれ持つ芸術的可能性を開き、社会に芸術が機能する場や仕組み創出を探る芸術的活動を多彩に展開してきた。特に平成27年、氏は、まち全体の連携する中にアート沸き立つ夜を出現させる「六本木アートナイト」の芸術監督を3年連続して務めた。加えて、アールブリュット関係美術館連繋(れんけい)「TURN／陸から海へ(ひとがはじめからもっている力)」展監修や「bigdatana—たなはもののすみか」(東京都美術館「とびらプロジェクト」)の企画「ノルウェーから東京・上野へ！キュッパのびじゅつかん—みつめて、あつめて、しらべて、ならべて」の一部)企画なども通して、大きな実りを結んだ。
評論等	亀井 若菜	亀井若菜氏はこれまで日本中世美術史のパフォーマティブな解説を追究してきた。研究者が「神」の立場に身を置いて作品の「客観的特性」を解き明かすという伝統的な美術史の方法に対し、氏の武器は、作品をあらしめている社会的・歴史的条件的分析、表象としての作品の精緻な解説、そして女性研究者としての自身の考え方に対する意識である。読者は、「粉河寺縁起絵巻(こかわでらえんぎえまき)」、「信貴山縁起絵巻(しぎさんえんぎえまき)」、「掃墨物語絵巻(はいずみものがたりえまき)」の3点の中世絵巻について、単に所与の結論を与えられるのではなく、当時の男女の社会的役割の差異に基づく解釈によって、これらの絵巻が時に思い掛けない結末を示していることを心ときめかせつつ知るのである。
評論等	長木 誠司	本書は、19世紀に頂点を築いたオペラ芸術が20世紀においてどれほど多様な変貌を遂げたかを、作曲家と作品の紹介にとどまらず、支えとなる社会機構や世界思潮との関係、運営と上演の実際にも踏み込んで、幅広く詳細に論じたものである。世界各地で展開される先端的な公演に自ら足を運び、オペラ史全体への博識と高度な専門的判断力をもって縦横に論じる様子は精彩にあふれ、信頼性も高い。世界的にも前例のない大著と評価し、贈賞する。

平成27年度(第66回)芸術選奨 贈賞理由一覧

【文部科学大臣賞】

部門	受賞者名	贈賞理由
メディア芸術	久保田 晃弘	久保田晃弘氏は「ARTSATプロジェクト」において芸術という概念を宇宙空間に投げ掛けた。この深宇宙彫刻としての芸術衛星プロジェクトは、宇宙空間に文化としての芸術の一步を踏み出すという、大胆なプロジェクトである。多摩美術大学と東京大学のプロジェクトでの中心的な立場で成功に導いた氏は新たなメディア表現を発信するメディア芸術に新たな扉を開いた。芸術衛星の開発においても、厳しい熱環境と強い放射線を浴び続ける宇宙空間での完全な動作を保証しなければ、達成できない。この「ARTSATプロジェクト」は文化の手の届かないと思われていた深宇宙にまさしく一石を投じたメディアアートの成果として、芸術選奨文部科学大臣賞にふさわしい。それは今も静かに宇宙を回り続けている。

平成27年度(第66回)芸術選奨
文部科学大臣新人賞 贈賞理由

平成27年度(第66回)芸術選奨 贈賞理由一覧

【文部科学大臣新人賞】

部門	受賞者名	贈賞理由
演劇	成田 達志	成田達志氏は、卓抜な技量と清新な感性を併せ持つ、志の高い小鼓役者である。平成27年は、殊に「烏頭(うとう)」「姨捨(おばすて)」の舞台上演において、彩りのある表現力で卓越した芸域を見せた。能に用いられる打楽器の中で最も優しい音色を持つ小鼓は、作品の情感を規定する重要な役であるが、氏は幸(こう)流人間国宝であった故曾和博朗(そわひろし)氏の芸の粋を継承し、これを見事開花させており、今後の芸の深化も大いに期待される。旺盛な探求心、能の発展普及への情熱によって囃子方(はやしかた)仲間と共に立ち上げた「TTR能プロジェクト」は、能の可能性を開くものであり、併せて評価に値する。
映画	濱口 竜介	30代後半を迎える4人の女性たちの姿をリアリズムで描く「ハッピーアワー」は、丁寧な人間観察に基づくドラマ性と、個性的なカメラワーク、そして何よりもワークショップ出身で映画初出演となる女優たちの抜群の存在感によって、見る者を完全に映画の中に引きずり込んだ。丹念なドラマ作りと、映画の既成の常識を打ち破る時間の使い方に長(た)けた濱口竜介氏の演出力は、実に懐が広く、スケールの大きな映画監督の誕生を確信させる。既に海外での評価も得ており、今後の活躍が最も楽しみな存在である。
音楽	中村 恵理	中村恵理氏は、新国立劇場オペラ研修所に在籍中からその資質について高く評価されてきたソプラノ歌手だが、渡欧以来大きな飛躍を遂げ、現在はドイツ・バイエルン州立歌劇場の専属ソリストを務める。平成27年、氏は、東京と兵庫でオペラ・アリアを中心としたリサイタルを開いたが、きめ細やかで伸びのある美しい声質、豊かな声量、そして何よりも、アリアの内容を生き生きと多彩に表現する充実した歌唱で聴衆を魅了し、欧州での高い評価を裏付ける成果を上げた。
舞踊	山村 光	「山村光リサイタル」は東京、京都、大阪の三都で開催され、東京では地唄「お江戸十二月」、京都では地唄「都十二月」、大阪では地唄「浪花(なにわ)十二月」を中心に舞った。つまりそれぞれの土地の年中行事を描いた曲をその地で舞うという、誰も成し得なかった卓抜な企画であった。内容も充実しており「お江戸十二月」では江戸の芸者のように粋に、軽快に舞い、「都十二月」では祇園(ぎおん)祭などの様子を上品に華やかに舞った。「浪花(なにわ)十二月」では、明るくのどかな大坂の暮らしや風俗が、生き生きと浮かび上がった。また東西名流舞踊鑑賞会で地唄の名曲「ゆき」を舞い、雪の夜の孤独な女の追憶と心情を、上方の風情をもって嫺々(じょうじょう)と表現。傑出した成果を上げた。
文学	津村 記久子	津村記久子氏は、働く女性の日常と心理を描くリアルな小説で異彩を放ってきたが、「この世にたやすい仕事はない」は、そういった「女性の仕事」小説の新境地を切り開くものだ。実在するとは思えないのに妙に現実感がある不思議な仕事を転々とする30代半ばの女性の経験を通じて、現代社会の思いがけない断面が浮き彫りになる。その筆致はアイロニカルであると同時に温かく、上質のユーモアと哀愁を含む。類を見ない「お仕事ファンタジー」の傑作である。
美術	皆川 明	皆川明氏が率いるファッションブランド「ミナ ペルホネン」は平成27年、20周年を迎え、大規模な記念展が東京と長崎で開催された。「100ミナカケル」と題した展覧会では、「モノづくり」の現場において、氏の果たしている役割の大きさ、そして美術が産地の活性化に一役買っていることを実証していた。氏の「モノづくり」は、それ自身が作品として成り立つ、彼自身の手描きのドローイングから始まる。そこには作者の思想が色濃く反映しており、人と人、人と社会を結びながら、様々なプロダクトとして仕上がる。氏の「100」に込められた「限界を持たない」クリエイションの広がり人は人を動かし、地域を動かし、世界を動かしており、その才能は、贈賞に余りある。

部門	受賞者名	贈賞理由
放送	佐々木 聡	「奥底の悲しみ」は、敗戦前後の旧満州で性的暴行を受けた「特殊婦人」たちの知られざる悲劇を掘り下げながら、引揚者たちが封印してきた忌まわしい記憶と誠実に向き合い、戦後70年の年にふさわしい秀作である。佐々木聡氏は「ふたりの桃源郷」「笑って泣いて寄り添って」シリーズなど、地域密着型の長期取材による優れたヒューマンドキュメンタリーで知られるが、初めて「戦争」という大きなテーマに取り組み、新境地を開拓した。
大衆芸能	柳家 三三	柳家三三氏は、東京落語の若手として、古典を奇をてらうことなく演じ、現代人にエンターテインメントの一分野として着実に伝えてきた。東京で毎月開く「月例三三独演」は通算100回を迎え、実力を更に鍛え上げた。全国各地を回る独演会「たびたびさんざ」は、地方の落語ファン拡大にも貢献している。狂言「佐渡狐(さどぎつね)」を原案にした新作「亀の甲」にも取り組むなど新境地を自ら切り開く姿勢も高く評価したい。
芸術振興	廣川 麻子	視聴覚障害者が舞台芸術を鑑賞する際の支援は、我が国ではまだほとんどの劇場で行われていない。自らが聴覚に障害を持つ廣川麻子氏は、この現状を変えようと、特定非営利活動法人シアター・アクセシビリティ・ネットワークを設立、「みんなで一緒に舞台を楽しもう!」を合言葉に、障害者の観劇環境の改善に向けた様々な活動を開始した。以後年を追うごとに、着実に活動の輪は広がっている。貴重な取組だけに、これから一層の活躍を期待したい。
評論等	山本 聡美	九相図(くそうず)とは女性の死体が腐敗し、白骨化する変化を9段階で描き表す絵画のことだが、本書はその歴史と意味を解き明かした好著である。男性の煩惱滅却の仏教修行に用いられた九相図(くそうず)は、不浄と無常の絵画として多様な展開を見せた。説話文学と交差し、漢詩や和歌と融合し、絵解きや版本による大衆化を経て近現代絵画に至るまで、脈々と続く九相図(くそうず)の伝統と変容の有様を紹介し、日本人の死生観にまで迫ろうとした努力は顕彰に値する。学術の成果を分かりやすく一般に伝えた点も評価したい。
メディア芸術	ヤマザキ マリ	10代の頃から日本を飛び出し、イタリア・シリア・ポルトガル・アメリカなどでの生活経験から、世界を視座にした創作を続ける。 古代ローマと日本を強引に風呂好きというだけで結び付けた、怪作「テルマエ・ロマエ」で名を上げた氏が今、目を付けているのは、人類史上屈指の知識情報革命を起こした2大巨人にして変人、「スティーブ・ジョブズ」と「プリニウス」。この慧眼(けいがん)には恐れ入った。片や評伝原作付、片や共作者ありといいながらも、出版関係者や読者を知的興奮の渦に巻き込んでいるのは、ほかならぬ氏の地球人類としての実体験に基づいた、探究の衝動ではないか!? 作品の国際的な評価だけでなく、グローバルに通じるオピニオン・リーダーとしてのマンガ家がいよいよ登場したことにワクワクする。

平成27年度(第66回)芸術選奨
選考経過

平成27年度(第66回)芸術選奨 選考経過一覧

部門	選考経過
演劇	演劇部門は選考審査員、推薦委員から、文部科学大臣賞14名、文部科学大臣新人賞21名の推薦があった。文部科学大臣賞で5名、文部科学大臣新人賞では7名の演出家、劇作家が入ったのが大きな特徴である。第一次選考審査会の文部科学大臣賞では、活発な議論の末、伝統芸能2名を含む5名に絞り込んだ。文部科学大臣新人賞は同じく伝統芸能2名を含む6名を選び抜いた。 第二次選考審査会も文部科学大臣賞から審査と評価を重ねた。選考審査員全員が自ら推薦する候補者だけでなく5名全員について数度発言。最初に「グッドバイ」で独特の演出と優れた劇作が評価されたケラリーノ・サンドロヴィッチ氏が抜け出した。次に3作品での演技の中でも「スコット&ゼルダ」が光った濱田めぐみ氏が選ばれた。文部科学大臣新人賞に移ると更に白熱した討議の展開となった。候補者6名全員の実力と高い将来性に大差はないものの、能楽師小鼓方の成田達志氏が一つ抜け出して選出となった。今年度は東西地区の委員が直接見ていない候補者についてたつぷりと吟味を尽くしたことを付記しておきたい。
映画	映画部門では、選考審査員及び推薦委員から、文部科学大臣賞候補者として10名、文部科学大臣新人賞候補者として10名の推薦があった。第一次選考審査会では、文部科学大臣賞候補10名について、それぞれの審査員が推薦する候補者の業績、推薦理由について述べ、推薦委員の候補者についても、その業績、推薦理由を確認した。それを基に、選考審査員によって活発な議論が交わされ、第一次選考審査会では7名の候補者に絞り込んだ。同様の選考で、文部科学大臣新人賞では8名の候補者に絞り込んだ。 第二次選考審査会では、候補者の業績について、様々な角度から、更に慎重かつ精細な議論が重ねられ、文部科学大臣賞には、「岸辺の旅」「さようなら」をはじめ、撮影監督として日本映画を支えてきた芦澤明子氏と「龍三(りゅうぞう)と七人の子分たち」で照明技師として見事な成果を上げた高屋齋氏への贈賞が決まった。文部科学大臣新人賞は、ワークショップから演技未経験者を起用し、総尺5時間17分の大作を監督した「ハッピーアワー」の濱口竜介氏に決まった。
音楽	音楽部門の選考審査員と推薦委員より挙げられたのは、文部科学大臣賞候補者12名、文部科学大臣新人賞候補者12名であった。候補者の活躍分野は、邦楽器、洋楽器、声楽、指揮、作曲などの多岐にわたり、文部科学大臣賞候補者には、文部科学大臣新人賞候補者に重複する人物も含まれていた。第一次選考審査会では、選考審査員と推薦委員が提出した選奨業績と推薦理由に基づき、各候補者に対する活発な意見交換を行った。その結果、第二次選考審査会の対象として、文部科学大臣賞候補5名、文部科学大臣新人賞候補5名に絞り込まれた。 第二次選考審査会では、まず文部科学大臣賞について討議した。各候補者の業績について、改めて慎重に検討した結果、邦楽囃子(はやし)笛方の中川善雄氏と指揮者の児玉宏氏への贈賞が決まった。両人とも、特に平成27年において、蓄積してきた活動を集約し、その分野の音楽の魅力を鮮烈に社会に発信したことが高く評価された。続いて、文部科学大臣新人賞についての討議を行った。新人としての実績と将来性をどのように評価するか、議論は白熱し、2名の有力候補者に絞り込まれた。最終的に、ソプラノ歌手の中村恵理氏への贈賞が決まった。
舞踊	舞踊部門では、選考審査員及び推薦委員から文部科学大臣賞の候補として13名、文部科学大臣新人賞の候補として17名が挙げられた。第一次選考審査会では、それら全ての候補者について検討した。文部科学大臣賞、文部科学大臣新人賞両方にまたがっている候補、ジャンルの特殊性などを併せて討議し、文部科学大臣賞5名(日本舞踊家2名、バレエダンサー1名、振付家1名、琉球舞踊家1名)、文部科学大臣新人賞7名(日本舞踊家2名、バレエダンサー2名、コンテンポラリー系1名、フラメンコ系1名、琉球舞踊家1名)に絞り込んだ。 第二次選考審査会では、第一次選考審査会を踏まえて、選考審査員が順次、文部科学大臣賞、文部科学大臣新人賞候補について意見を述べ、議論の上で更に絞り込み、その結果、文部科学大臣賞は、バレエとの出会いの探究、伝承芸に成果を見せた藤間蘭黄氏と、バレエ表現に成果を見せた中村祥子氏、文部科学大臣新人賞は、上方舞の技芸と企画の成果で山村光氏に決定した。 近年、舞踊部門は、ジャンルの多様化が進み、地域上演が増えている点を付記しておきたい。

平成27年度(第66回)芸術選奨 選考経過一覧

部門	選考経過
文学	文学部門では、選考審査員及び推薦委員から文部科学大臣賞の候補として15名、文部科学大臣新人賞の候補として12名が挙げられた。第一次選考審査会では、慎重な議論を尽くし、文部科学大臣賞は6名(小説家4名、詩人2名)に、文部科学大臣新人賞は5名(小説家4名、歌人1名)に絞り込んだ。 第二次選考審査会では、第一次選考審査会での議論を踏まえ、候補者全員のこれまでの業績や今回審査対象となった作品について、更に深く突っ込んだ検討が行われた。その結果、文部科学大臣賞には、多彩な人間模様の哀歓を練達の文章で浮かび上がらせた短編集「太陽は気を失う」の作者乙川優三郎氏と、終戦直後の混乱期のこれまで語られることの少なかった世相の一面に鮮やかな照明を当てた長編「水曜日の凱歌(がいか)」の作者乃南アサ氏、以上2名が最もふさわしいという結論を得た。 文部科学大臣新人賞については議論が白熱したが、最終的に、現実社会の「隙間」を巡(めぐ)るユーモラスで不条理な冒険譚(たん)とでも言うべき連作短編風の長編小説「この世にたやすい仕事はない」の作者、津村記久子氏への贈賞が決まった。
美術	美術部門において、選考審査員及び推薦委員から候補者として挙げられたのは、文部科学大臣賞17名、文部科学大臣新人賞16名であった。第一次選考審査会では、選考審査員の推した候補者については推薦した選考審査員が、推薦委員の推した候補者については専門領域の近い選考審査員が推薦理由や業績について説明を行い、結果として、文部科学大臣賞候補5名、文部科学大臣新人賞候補6名が選ばれた。 第二次選考審査会では、各選考審査員が、自分が挙げた候補者について補足説明を行うとともに、自分が挙げなかった候補者について所見を述べる形で、より踏み込んだ議論が重ねられた。芸術選奨の選考対象は主に前年の1年間の業績であるため、突出した短期的業績を上げやすい分野と上げにくい分野の違いがあることが、美術部門の選考の難しい点と言えよう。結果として、今年度の文部科学大臣賞には、従来の日本画の枠を踏み越えた表現や主題に取り組んできた村上隆氏と、曜変天目(ようへんてんもく)の復元において顕著な業績をあげた林恭助氏が選ばれ、また文部科学大臣新人賞には、展覧会等を通じてファッション・デザインという仕事の啓蒙(けいもう)においても功績のあった皆川明氏が選ばれた。
放送	今年度は放送部門において、選考審査員と推薦委員により文部科学大臣賞11名、文部科学大臣新人賞11名が推薦された。その中から第一次選考審査会では文部科学大臣賞候補6名、文部科学大臣新人賞候補6名を第二次選考審査会の選考に残した。 第二次選考審査会では各候補者の作品について選考審査員一人一人が意見を率直に述べ、文部科学大臣賞、文部科学大臣新人賞共にドキュメンタリーの制作者に授与することに決定した。 文部科学大臣賞の矢島良彰氏は中国等の実情に迫る優れたドキュメンタリーを数多く制作しており、その活動はドキュメンタリー界に多くの示唆を残している。従軍看護婦を描いた本年度の作品も「女性にとっての戦争」という独自の視線を鋭く伝えた優れた作品だった。佐々木聰氏は引揚者たちが受けた悲劇を本人の生の言葉として引き出し、改めて戦争と真摯(しんし)に向かい合う番組を構成した。その演出力を高く評価し、更なる才能を期待する文部科学大臣新人賞に選定した。平成27年は放送が戦後70年の歴史を今に残すべき使命の年でもあり、両賞の受賞者が戦争を問うジャーナリズムに基づいた制作者であったことは、意義ある選考結果になったと言える。
大衆芸能	大衆芸能部門は、多ジャンルを対象にする。検討が白熱し、時として打開に苦しむが、今回はその傾向が強かった。 はじめに、選考審査員と推薦委員が推薦した文部科学大臣賞候補9名、文部科学大臣新人賞候補8名からの絞り込みが行われ、文部科学大臣賞は4組(漫才師1組、落語家1名、演芸1名、音楽1名)、文部科学大臣新人賞は4組(漫才師2組、落語家2名)が、第二次選考審査会に残った。 累積の実績を議論しつつも対象年の取組を注視し議論した結果、幅広く支持された漫才師、オール阪神・巨人がまず対象に選ばれた。更にあと一人を選ぶ段階で、会議は行き詰まり、一旦文部科学大臣新人賞の選考に移った。 第二次選考審査会に残った文部科学大臣新人賞の候補者は、甲乙付け難い面々だったが、独演会の成果並びに全国各地で落語ツアーを積極的に開催している柳家三三氏に意見はまとまった。 場面は再び、文部科学大臣賞の選考に戻ったが、候補者は音楽と演芸分野の2名で、同じ物差しでは測れない。大胆で画期的な実績を残した2名のうち、最終的に日本の音楽の在り方を変え、作詞家生活45年を迎えた松本隆氏に決定した。

平成27年度(第66回)芸術選奨 選考経過一覧

部門	選考経過
芸術振興	芸術振興部門は、「新たな芸術分野の創造、普及」や「複数の部門・分野にわたっての活動」、また「他部門に該当しない文化芸術活動」が対象となっているが、今年度も文部科学大臣賞に12名、文部科学大臣新人賞に7名、選考審査員と推薦委員から、それぞれ多様な観点の下に推挙された。第一次選考審査会では、推薦書や活動資料を基に、どの項目において著しい成果があったか、再度、賞の趣旨に戻って検討し、文部科学大臣賞候補4名、文部科学大臣新人賞候補5名に絞った。 第二次選考審査会では、各候補者についての選考審査員の追加調査報告も踏まえ慎重に検討した結果、文部科学大臣賞には「六本木アートナイト2015」をはじめ、全国各地でユニークなアートの在り方を提示した日比野克彦氏を、文部科学大臣新人賞にはシンポジウム「より良い観劇システムの構築に向けて、今できること」の開催など、障害の有無を問わず誰もが舞台を楽しめる環境づくりに取り組んでいる廣川麻子氏を選出した。
評論等	評論等部門には、充実した内容の著作が幾つも推薦を受け、審査は最初難航するかに見えた。扱う分野は美術、音楽、文学、映画、舞台芸術など、タイプとしては一般向けの評論から学術的な研究書に近いものまで、多様な主題と形式を持つため、比較検討するのが容易ではない。しかし、最終的には、著作としての意義、内容の面白さ、日本語の質、候補者の仕事全体との関わりなどを鑑みて、選考審査員の判断が大きく異なることはなく、議論を尽くした上で賞にふさわしい著作が選ばれた。 選考には、他部門まで含む選考審査員及び推薦委員から、文部科学大臣賞23名、文部科学大臣新人賞14名の候補が挙げられた。第一次選考審査会では、そこから文部科学大臣賞7名、文部科学大臣新人賞5名の著作を選び、検討吟味の対象とした。そして、第二次選考審査会で、亀井若菜氏の「語りだす絵巻—『粉河寺縁起絵巻(こかわでらえんぎえまき)』『信貴山縁起絵巻(しぎさんえんぎえまき)』『掃墨物語絵巻(はいずみものがたりえまき)』論」と、長木誠司氏の「オペラの20世紀 夢のまた夢へ」を文部科学大臣賞に、山本聡美氏の「九相図(くそうず)をよむ 朽ちてゆく死体の美術史」を文部科学大臣新人賞にそれぞれ選出した。
メディア芸術	メディア芸術部門では、選考審査員と推薦委員から文部科学大臣賞候補には8名の候補者が、文部科学大臣新人賞候補としては12名の候補者が挙げられた。本分野はメディアアート、漫画、アニメーション、エンターテインメントデザインと多岐にわたる分野であり、それぞれのすばらしい成果から絞り込むのに議論を尽くした。第一次選考審査会では平成27年の成果として、各分野で特に目覚ましい創作活動で、文部科学大臣賞候補者として4名、文部科学大臣新人賞候補者として4名に絞られた。第二次選考審査会においては、それぞれの作品の評価は均衡していたが、文部科学大臣賞は、今でなければ成し得ないこと、芸術作品として宇宙に表現される挑戦的な試みを確実な技術の積み上げで成し遂げた、「ARTSATプロジェクト」をまとめ上げた久保田晃弘氏に対し、新たなメディア芸術の価値を創出したとして贈られた。また、文部科学大臣新人賞は新人賞候補とはいえ、既に多くの実績を持つ作家たちからの選定となり、絞り込みに苦労した。その中で、常に題材に真摯(しんし)に取り組み、人の歴史に対し、ストレートに焦点を当てた「スティーブ・ジョブズ」ほかの成果によってヤマザキマリ氏を文部科学大臣新人賞に選出した。

芸術選奨実施要項

昭和45年 5月13日
文化庁長官裁定
一部改正 平成11年 5月13日
一部改正 平成13年 1月 6日
一部改正 平成15年 4月 1日
一部改正 平成16年 4月 1日
一部改正 平成19年 12月26日
一部改正 平成24年 4月 1日

1 趣 旨

芸術各分野において、優れた業績をあげた者またはその業績によってそれぞれの部門に新生面を開いた者を選奨し、これに芸術選奨文部科学大臣賞または芸術選奨文部科学大臣新人賞をおくることによって芸術活動の奨励と振興に資する。

2 部 門

- (1) 演劇（歌舞伎・能楽・文楽・新派・新劇・ミュージカル等の劇作家，演出家，演技者，舞台美術家等）
- (2) 映画（劇映画・記録映画等の演出家，脚本家，撮影者，演技者等）
- (3) 音楽（邦楽・洋楽・オペラ等の演奏家，指揮者，作曲家，演出家，舞台美術家等）
- (4) 舞踊（邦舞・洋舞等の舞踊家，演出振付家，舞台美術家等）
- (5) 文学（小説・短歌・俳句・詩・大衆文学・児童文学等の作家，翻訳家等）
- (6) 美術（絵画・彫刻・工芸・書・写真・デザイン・建築等の作家）
- (7) 放送（ラジオ・テレビのドラマ・ドキュメンタリー等の作家，演出家，演技者等）
- (8) 大衆芸能（落語・講談・浪曲・漫才・大衆演劇・ショー・ポピュラーミュージック等の作家，作曲家，演出家，演技者等）
- (9) 芸術振興（新しい領域や複数の部門にわたり文化芸術活動を行っている者）
- (10) 評論等（芸術評論家，文化芸術活動に著しい貢献のあった者）
- (11) メディア芸術（デジタル作品（デジタル技術を用いて作られたアート作品やエンターテインメント作品等）・アニメーション・マンガの作家等）

3 賞の対象

- (1) 賞は，文部科学大臣賞状及び賞金とする。
- (2) 芸術選奨文部科学大臣賞は，特に優れた業績をあげた芸術家（個人）を対象とするもので，各部門2名以内（ただし，放送部門，芸術振興部門，メディア芸術部門は1名以内）を原則とする。
- (3) 芸術選奨文部科学大臣新人賞は，新人の芸術家（個人）を対象とするもので，各部門1名以内を原則とする。
- (4) 過去に受賞したものは同一部門の同種の賞については，原則として対象としない。

4 選考の時期及び選考の基準

- (1) 選考は，毎年，原則として1月中に行うものとし，選考の対象となる業績は，主として前年の1月から前年の12月までの間にあげられたものとする。
- (2) 選考に際しては，これまでの業績に加え，将来性，年齢，他の受賞歴等も勘案して選出する。

5 選考方法

- (1) 各部門ごとに芸術に関し識見を有する者の協力を得てその審査を行い，受賞者を決定する。
- (2) 前項の審査のため，各部門ごとに選考審査会を設置する。
- (3) 各部門ごとに推薦委員を設け，選考審査会に候補者を推薦する（評論等部門，芸術振興部門を除く）。
- (4) 選考審査員及び推薦委員は当該部門の実演家，専門家及び学識経験者の中から文化庁長官が委嘱する。

芸術選奨実施細則

平成 11 年 5 月 13 日
文化庁次長決裁
一部改正 平成 13 年 1 月 6 日
一部改正 平成 15 年 4 月 1 日
一部改正 平成 16 年 4 月 1 日
一部改正 平成 19 年 12 月 26 日
一部改正 平成 24 年 4 月 1 日

1 選考実績

実施要項 4 (2) の選考にあたっては、下記のことに留意する。

- (1) 日本芸術院会員、重要無形文化財（各個認定）保持者、叙勲、紫綬褒章受章者、日本芸術院賞受賞者等すでに国の栄典を受けている者については授賞対象としない。
- (2) 物故者は対象としない。
- (3) 受賞者の年齢は、授賞時原則として文部科学大臣賞は 70 歳未満、新人賞は 50 歳未満とする。
- (4) 受賞者は、芸術活動を通じて社会に貢献し、国民の模範となり得る者であることとする。

2 選考方法

- (1) 選考にあたっては、各部門の選考審査員及び推薦委員が、それぞれの部門にかかる候補者を推薦することができる。ただし、評論等部門及び芸術振興部門については、他部門の選考審査員及び推薦委員からも、それぞれの部門にかかる候補者を推薦することができるものとする。
- (2) 芸術振興部門における「新しい領域や複数の部門にわたり文化芸術活動を行っている者」とは、次のような者をいう。
 - ① 新たな芸術分野を創造、または普及させるなど著しい貢献のある者
 - ② 複数の部門・分野にわたった文化芸術活動を行い、その活動が斯界に大きな影響を与えている者
 - ③ 他部門に該当しない文化芸術活動を行っている者で、その活動が国内もしくは国外において広く一般に認知され、一定の評価を得ている者

3 実施要項 3 (3) に定める「新人の芸術家」は次のものをいう。

- (1) 活動の期間及び実績が比較的少ないこと。
- (2) 今後活躍が大いに期待されること。

平成27年度(第66回)芸術選奨委員一覧【選考審査員】

【演劇部門】			【放送部門】		
おおしま 大島	ゆきひさ 幸久	演劇ジャーナリスト	いしい 石井	あきら 彰	放送作家
おおたに 大谷	せつこ 節子	成城大学教授	こうたき 上瀧	てつや 徹也	日本大学名誉教授、評論家
かめおか 亀岡	のりこ 典子	産経新聞大阪本社文化部編集委員	しげのぶ 重延	ゆたか 浩	(株)テレビマンユニオン 会長
かわい 河合	しゅういちろう 祥一郎	東京大学大学院教授	すずき 鈴木	よしかず 嘉一	放送評論家
たかはし 高橋	ゆたか 豊	毎日新聞社客員編集委員、演劇評論家	にしむら 西村	としき 与志木	フリープロデューサー
たちばな 立花	けいこ 恵子	演劇評論家	はやし 林	まりこ 真理子	作家
わたなべ 渡辺	ひろし 弘	(公財)埼玉県芸術文化振興財団業務執行理事兼事業部長	やぎ 八木	やすお 康夫	(株)TBSテレビ執行役員
【映画部門】			【大衆芸能部門】		
あおき 青木	しんや 眞弥	(株)キネマ旬報社編集部部长	いまおか 今岡	けんたろう 謙太郎	武蔵野美術大学教授
かわしま 川島	あきまさ 章正	映像編集技師	かみめま 上沼	しんべい 真平	テレビプロデューサー
きたがわ 北川	れい子 子	映画評論家	なかむら 中村	まさき 真規	演芸プロデューサー
たまた 滝田	ようじろう 洋二郎	映画監督	はぎわら 萩原	けんた 健太	音楽評論家
のむら 野村	まさあき 正昭	映画評論家	ふるかわ 古川	あやこ 綾子	国際日本文化研究センター特任助教、上方演芸研究家
みやざわ 宮澤	せいいち 誠一	日本大学芸術学部映画学科教授	ゆい 油井	まさかず 雅和	毎日新聞記者
やたべ 矢田部	よしひこ 吉彦	東京国際映画祭プログラミング・ディレクター	わたなべ 渡邊	なひさお 肇久	演芸コラムニスト、民放ウェブ媒体エンタメ編集長
【音楽部門】			【芸術振興部門】		
おかべ 岡部	しんいちろう 真一郎	明治学院大学教授	あけち 明智	けいこ 恵子	キネマ旬報編集長
おぼた 小畑	つねお 恒夫	昭和音楽大学教授	いとう 伊藤	やすお 裕夫	日本文化政策学会会長
かのう 加納	マリ	武蔵野音楽大学講師	かたやま 片山	まさお 正夫	(公財)セゾン文化財団常務理事
なかむら 中村	たかし 孝義	大阪音楽大学理事長	こばやし 小林	まり 真理	東京大学大学院人文社会科学系研究科准教授
のがわ 野川	みほこ 美穂子	東京藝術大学講師	さかい 酒井	まこと 誠	武蔵野音楽大学非常勤講師、日本芸術文化振興会演劇PD
みやけ 三宅	ゆきお 幸夫	慶應義塾大学名誉教授	ちやうき 長木	せいじ 誠司	東京大学教授
やまかわ 山川	なおはる 直治	日本音楽研究家	ながた 長田	けんいち 謙一	名古屋芸術大学大学院美術研究科美術学部教授
【舞踊部門】			【評論等部门】		
あまがさき 尼ヶ崎	あきら 彬	学習院女子大学教授	あかさか 赤坂	のりお 憲雄	学習院大学教授
いなた 稲田	な お み 奈緒美	舞踊評論家	いまやま 礪山	ただし 雅	国立音楽大学招聘教授、大阪音楽大学客員教授
おりた 織田	こうじ 紘二	独立行政法人日本芸術文化振興会 顧問	おがた 尾形	としろう 敏朗	映画評論家
ながの 長野	ゆき 由紀	舞踊評論家	かわむら 川村	みなと 湊	法政大学国際文化学部教授
ひらの 平野	ひでとし 英俊	舞踊評論家	すずき 鈴木	ときこ 杜幾子	明治学院大学名誉教授
ほんだ 本多	じつお 実男	(公社)日本バレエ協会理事、J. Honda Ballet主宰	みうら 三浦	あつし 篤	東京大学大学院総合文化研究科教授
みやじ 宮辻	まさお 政夫	演劇評論家	みずおち 水落	きよし 潔	演劇評論家
【文学部門】			【メディア芸術部門】		
さわ 澤	こうま 好摩	俳人	あべ 阿部	かずなお 一直	(公財)山口市文化振興財団 山口情報芸術センター副館長
しのだ 篠田	せつこ 節子	小説家	いわたに 岩谷	とおる 徹	東京工芸大学教授
すずき 鈴木	ふみひこ 文彦	八重洲ブックセンター 顧問	こばた 木幡	かずえ 和枝	アートプロデューサー、東京藝術大学名誉教授
ながた 永田	かずひろ 和宏	京都産業大学教授	せきぐち 関口	あつひと 敦仁	愛知県立芸術大学教授
ぬまの 沼野	みつお 充義	東京大学大学院人文社会科学系研究科教授	たけみや 竹宮	けいこ 恵子	漫画家、京都精華大学学長
まつうら 松浦	ひさき 寿輝	作家、詩人	ほそがや 細萱	あつし 敦	東京工芸大学芸術学部マンガ学科教授
みうら 三浦	まさし 雅士	文芸評論家	よこた 横田	まさお 正夫	日本大学教授
【美術部門】			【部門内五十音順】		
えんどう 遠藤	あきこ 彰子	武蔵野美術大学教授			
おさき 尾崎	まさあき 正明	茨城県近代美術館館長			
かねこ 金子	けんじ 賢治	茨城県陶芸美術館長			
くりゅう 栗生	あきら 明	(株)栗生総合計画事務所代表取締役			
しま 島	あつひと 敦彦	愛知県美術館館長			
しまたに 島谷	ひろゆき 弘幸	九州国立博物館長			
すどう 須藤	れいこ 玲子	東京造形大学教授			
にいみ 新見	りゅう 隆	武蔵野美術大学教授			
ふくなが 福永	おさむ 治	広島市現代美術館館長			
まつもと 松本	とおる 透	東京国立近代美術館副館長			

平成27年度(第66回)芸術選奨委員一覧【推薦委員】

【演劇部門】			【美術部門】		
あらい 新井	こうすけ 浩介	日本芸術文化振興会プログラムオフィサー	いがらし 五十嵐	まさる 卓	損保ジャパン日本興亜美術館学芸課長
いのうえ 井上	かつら 桂	水戸芸術館演劇部門コーディネーター	おおはし 大橋	しゅういち 修一	埼玉大学教授
こうの 河野	たかし 孝	演劇評論家、ジャーナリスト	おがわ 小川	あつお 敦生	多摩美術大学教授
しちじ 七字	えいすけ 英輔	演劇評論家	かとう 加藤	ひろこ 弘子	東京都現代美術館学芸員
いで 伊達	なつめ なつめ	演劇ジャーナリスト	くすの 桶見	きよし 清	首都大学東京システムデザイン学部准教授
はぎお 萩尾	ひとみ 瞳	映画・演劇評論家	しみず 清水	みさ子 美三子	女子美術大学教授
はやし 林	なおゆき 尚之	日刊スポーツ新聞社文化社会部編集委員	とだて 外館	かずこ 和子	美術評論家
ばんどう 板東	あやこ 亜矢子	演劇記者	ないとう 内藤	ひろし 廣	建築家
ひかわ 氷川	まりこ まりこ	伝統文化ジャーナリスト	なか 中	かづシゲ 克シゲ	京都市立芸術大学教授
ふるいど 古井戸	ひでお 秀夫	東京大学教授	はしもと 橋本	ゆうこ 優子	宇都宮美術主任学芸員
【映画部門】			みずの 水野	まなぶ 学	(株)グッドデザインカンパニー代表取締役
うめづ 梅津	あや 文	GEM Partners株式会社代表取締役	みなみ 南	ゆうすけ 雄介	国立新美術館副館長兼学芸課長
えりかわ 篠川	クロ	映画評論家、司会	もり 森	ひとし 仁史	金沢美術工芸大学 柳宗理記念デザイン研究所所長
おおまえ 大前	かずみ 和美	フリー撮影監督	やすぎ 安来	まさひろ 正博	国立国際美術館主任研究員
おくむら 奥村	まさる 賢	いわき明星大学教授	やまさき 山崎	つよし 剛	金沢美術工芸大学教授
きたこうじ 北小路	かし 隆志	京都造形芸術大学准教授	やまもと 山本	かずひろ 和弘	栃木県立美術館シニア・キュレーター
こが 古賀	ふとし 太	日本大学芸術学部教授	やまもと 山本	なおあき 直彰	武蔵野美術大学特任教授
さかの 坂野	ゆか	(公財)川喜多記念映画文化財団チーフコーディネーター	【放送部門】		
ひの 樋野	かおり 香織	神戸アートビレージセンター 映像担当	いりえ 入江	たのし	メディアプロデューサー
ひらの 平野	きょうこ 共余子	映画史研究家	おかむら 岡室	みな 美奈子	早稲田大学教授、早稲田大学坪内博士記念演劇博物館館長
よしだ 吉田	かおる 馨	大阪大学非常勤講師、日独文化研究所研究員	しおだ 塩田	じゅん 純	NHK大型企画開発センター エグゼクティブ・プロデューサー
【音楽部門】			たにかわ 谷川	たけし 建司	早稲田大学政治経済学術院客員教授
いしだ 石田	あきこ 麻子	昭和音楽大学オペラ研究所教授	にわ 丹羽	よしゆき 美之	東京大学准教授
いとう 伊東	のぶひろ 信宏	大阪大学大学院教授	はたと 旗本	こうじ 浩二	読売新聞大阪本社文化部記者
おかだ 岡田	あけお 暁生	京都大学人文科学研究所教授	はまさき 濱崎	こうじ 好治	(公財)川崎市生涯学習財団 川崎市市民ミュージアム学芸員主査
こがじ 小鍛冶	くにたか 邦隆	東京藝術大学音楽学部作曲科教授	ひぐち 樋口	なおみ 尚文	映画評論家、映画監督
こくど 國土	じゅんいち 潤一	音楽評論家	みはら 三原	おさむ 治	放送作家、日本大学芸術学部放送学科非常勤講師
さいとう 齊藤	ひろつぐ 裕嗣	東京文化財研究所無形文化遺産部客員研究員	わたべ 渡部	みのる 実	映画評論家
しもの 下野	たつや 竜也	読売日本交響楽団首席客演指揮者	【大衆芸能部門】		
たかばたけ 高畠	せいこ 整子	フリーライター	おおとも 大友	ひろし 浩	演芸研究家、文筆家
たけうち 竹内	ゆういち 有一	京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター准教授	おぎた 荻田	きよし 清	梅花女子大学名誉教授
つかはら 塚原	やすこ 康子	東京藝術大学音楽学部楽理科教授	かとり 香取	よしひこ 良彦	洗足学園音楽大学教授
【舞踊部門】			かわさき 川崎	ひろし 浩	毎日新聞社学芸部専門編集委員
あべ 阿部	さとみ	舞踊評論家	さとう 佐藤	ともみ 友美	東京かわら版編集人
いづか 飯塚	ともこ 友子	産経新聞東京本社文化部記者	せきや 関谷	もとこ 元子	音楽評論家
おかみ 岡見	さえ	大学講師、舞踊評論家	ぬのめ 布目	えいいち 英一	演芸研究家
からつ 唐津	えり 絵理	愛知県芸術劇場シニアプロデューサー	まえだ 前田	けんじ 憲司	寄席芸能史研究家
こが 古賀	しろう 司郎	(公社)日本舞踊協会事務局長	まつお 松尾	みよこ 美矢子	演芸ライター
しんどう 新藤	ひろこ 弘子	舞踊評論家	むらい 村井	こうじ 康司	音楽評論家、尚美学園大学講師
たちき 立木	あきこ 燐子	舞踊評論家	【メディア芸術部門】		
なかがわ 中川	としひろ 俊宏	武蔵野音楽大学教授	いいた 飯田	かずとし 和敏	立命館大学映像学部教授
みずおら 水落	ひろし 宏	舞踊評論家	いとう 伊藤	ガビン	編集者、クリエイティブ・ディレクター
むらやま 村山	くみこ 久美子	舞踊評論家、早稲田大学非常勤講師	こいで 小出	まさし 正志	東京造形大学教授、日本アニメーション学会会長
【文学部門】			こすぎ 小杉	みほこ 美穂子	京都精華大学非常勤講師
くりき 栗木	きょうこ 京子	歌人	しいな 椎名	ゆかり	翻訳者、東京藝術大学非常勤講師
げんゆう 玄侑	そうきゅう 宗久	作家	たかたに 高谷	しろう 史郎	アーティスト
こうの 紅野	けんすけ 謙介	日本大学文理学部教授	てらい 寺井	ひろのり 弘典	(株)ピクス クリエイティブディレクター、多摩美術大学特任教授
さいとう 齋藤	えみこ 恵美子	詩人	はまむら 浜村	ひろかず 弘	カドカワ株式会社 取締役
つじはら 辻原	のほる 登	作家	ひかわ 氷川	りゅうすけ 竜介	アニメーション特撮研究家、明治大学大学院客員教授
とえだ 十重田	ひろかず 裕一	早稲田大学文化推進部長兼文学学術院教授	みなもと 太郎	たろう 太郎	漫画家、マンガ研究家
なか 仲	かんぜん 寒蟬	佐久市立国保浅間総合病院地域医療部長	【部門内五十音順】		
なぐ 南木	けいし 佳士	小説家、医師			
のぎ 野崎	かん 歓	東京大学教授			
やなぎ 柳	のぶひろ 宣宏	湘南白百合学園中学高等学校教頭			